

東洋大学創始者で哲学者の井上円了氏が最初の哲学講義をした11月第一土曜日は、中野区の哲学堂公園で東洋大学による「哲学堂祭」(一般人参加可)が行われる。それが20分ほどで終了すると、公園内「宇宙館」の中で1時間ほど東洋大学教員による講演が行われる。内容は井上円了氏が「四聖」として祭った「釈迦・孔子・ソクラテス・カント」テーマが1年に一人ずつ循環する。私は4年間で「四聖」を一巡したので「一通り聴いたし、普段は公開しない建物の中にも入ったし」と思いながらも今年も自然と足が向いた。そう、全く自然な気持ちで。そんな今年、例によって雰囲気次第で誰とでも会話を始める私は、近くに立っている人に話しかけたら、その人は何とその日の演者の吉田公平教授だった(講演開始時に知った)。しかも帰りのバスでも一緒になり話をしたが、その人が「陽明学」研究の第一人者と言われていると知ったのは後のことである。私には肩書は見えない。人間が見えるだけである。全くいつもながら。

さて、その日の講演は「孔子」であったが、吉田先生曰く「東洋と西洋の哲学者を四聖(聖人)に選んだ井上円了氏はバランス感覚の取れた人」さらに「六賢(賢者)に孔子の『論語』の注を書いた朱子を入れているところ」から、「聖人」と「賢者」を1セットにして「生き方のモデル」にしたことが素晴らしいとのこと。「聖人」とは素敵に生きた人のこと。「素敵な人」とは「素=ありのままの自分」に「適した人生」を生きる人のこと。それは「社会」から逃げずにその中で自分の道を模索し努力し究めること。つまり井上円了氏は「社会から遠い立場で苦労もなく生きた人」ではなく「今在る人間社会において自分の人生を作るために努力した人」しか選んでいないところが素晴らしいということだ。つまり「孔子」はその努力をした人ということになる。

孔子の『論語』は彼の経験談である。15歳で「志=心の中の目線」を定めて学び、紆余曲折しながらも30歳位までには生きる方向を何となくつかみ、30代に選択肢の中で試行錯誤した。40歳で「もう迷えない」「この道一筋」という心境になったのはその努力の成果である。その覚悟が人生を豊かにした。しかし50歳で一人の努力の限界を超えるところは運命に任せた。60歳で他人の意見に素直に耳を傾け、70歳で他人も納得する自己を表現できた。孔子は当時にしてはかなり長命で73歳まで生きた。

そもそも東洋の思想「性善説」とは「自分の生き方」と「他人の生き方」双方を認める上に成り立つ。運命の「共有」とは「同情」することではない。「ひとつの不幸」は誰かに起こる確率の問題で、それは自分に起こったことかもしれないと思えば相手を認めて助け合えるという「運命の共有感」だそうだ。それが社会の中の自分だ。

孔子は母子家庭に育った。彼はその「運命」を「たまたま自分に回ってきたもの」として受け入れた。そしてその環境では独り立ちするために一生懸命勉強せざるを得なかった。努力は財産である。また「努力した」こと自体が自信につながる。その財産が「選択肢」を広げ、必然的に「選ぶ」迷いが生じ、試行錯誤の結果「これしかない」本道を発見した。そしてその道筋で死ぬまで可能性を秘めた発展途上であった。

井上円了氏の「根本のところでは考える力をつける必要がある」という哲学的教育理念は、孔子に見るような「選択の中の試行錯誤の努力」ができる力を養うものである。便利に自動機械化された世の中でも、自分というステージを演出するために選べる道はいくつかある。選択できる幸福を味わうことが可能性への挑戦なのだ。(2012.11.4)